第15回

有楽伯

うらはく

早稲田大学邦楽3サークル
若手OB有志による
箏・三味線・尺八の演奏会

令和元年五月二十五日（土）
十六時開演
紀尾井小ホール

ご挨拶

本日は、第15回有楽伯にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。有楽伯は、早稲田大学の邦楽3サークル「虚竹会」「竹友会」「箏曲研究会」出身者数名が、卒業後に練習場所を求めて集まったことをきっかけに発足しました。２００６年に第1回演奏会を開催し、今回で15回目を迎えます。幅広い世代のＯＢたちが演奏会に集い、旧交を温め、また新たに知己を得る、その楽しさと喜びを、毎年ありがたくかみしめております。

節目の今回は大胆にも、邦楽の殿堂ともいうべき紀尾井ホールを会場に選びました。幾多の名手の演奏を客席で聴き、「いつかここで」と夢に見た、その悲願を達成するときがきたのです。身の丈に合わないホールと分かっていても、奮起しないわけにはまいりません。

その発奮のせいかどうか、いつにもまして大曲・名曲が集まり、長丁場のプログラムとはなりました。休みやすみでも結構ですので、どうぞ終演までお付き合いくださいますようお願い申し上げます。

ご来場の皆さまをはじめ、親身にご指導くださる先生方、活動を支えてくれる家族、手弁当で裏方を引き受けてくれる仲間たち。演奏会運営の原動力は、皆さまの温かいご支援、ご助力をおいてほかにありません。末筆ながら改めて、心よりの御礼を申し上げます。

第15回有楽伯実行委員長
成澤　和則

演目

一、松竹梅
二、夜
三、七小町
四、鶴之巣籠
五、袖香炉
六、末の契
七、ゆき
八、新浮舟
九、通り・門付け・鉢返し
十、残月

演奏中の客席への出入り、写真撮影、私語はご遠慮くださいますようお願いいたします。

一、松竹梅

三橋勾当　作曲

歌詞

立ち渡る　霞を空の知るべにて　長閑き光り新玉の　春立つ今朝は足曳きの　山路を分けて大伴の　三津に来鳴くや鶯　南より笑ひ初む　薫りに引かれ声のうららか　羽風に散るや花の色　香もなほしはえあるこの里の　浪花は梅の名所

＜手事＞

君が代は濁らで絶えぬ御溝水末澄みけらし国民も　げに豊なる四つの海　千歳限れる常盤木も　今世の皆に引かれては　幾世限りもあらし吹く音　枝も栄ゆる若緑　生ひ立つ松に巣をくふ鶴の　久しき御代を祝ひ舞ふ

＜手事＞

秋はなほ月の景色も面白や梢々にさす影の　臥床にうつる夕間暮　外面は虫の声々にかけて幾代の秋に鳴く　音を吹き送る嵐につれて　そよぐは窓の叢竹

解説

松竹梅といえば、正月の門松に見られるように吉祥のシンボルとされるが、この曲も祝儀の際によくうたわれるめでたい曲である。前歌では大坂の梅と鶯、中歌では京都の松と鶴、後歌では江戸の竹と月がそれぞれうたわれる。「根曳の松」「名所土産」とともに、手事もの（歌と歌の間に長い器楽部分のある楽曲）の最高位に位置付けられる曲で、二回の華やかな手事が入る。各所に鶴の鳴き声がちりばめられているなど、春から秋にかけての風景が華やかな手とともに感じられる曲となっている。

参考文献
・「生田山田 両流箏唄全解（中巻）」
（今井通郎著、武蔵野書院）

箏　吉住　秀之
三絃　上原ひろ子
尺八　河宮　拓郎

二、夜

自作曲

歌詞

影ふれる　十歳むかしの零れるを　月のあなたへ　おくりとどけむ

解説

作曲を教わったこともなく、楽理にも通じておらず、演奏技術も道半ばから程遠いにもかかわらず、「作ってみたい」と思ったまま作詞作曲をいたしました。私の大切な人たちに向けた曲です。ご笑覧いただければ幸いです。

三絃　嶋長　直志

三、七小町

光崎検校　作曲
八重崎検校　箏手付

歌詞

蒔かなくに　何を種とて浮草の　浪の畝々生ひ茂るらん
草子洗ひも名にし負ふ　その深草の少将が　百夜通ひしも理りや
日の本なれば照りもせめ　さりとてはまた天が下とは
下ゆく水の逢阪の　庵へ心関寺の　うちも卒都婆も袖褄を引く手数多の昔は小町
今は恥ずかし市原野　古跡も清き清水の　大悲の誓ひ輝きて

＜手事＞

曇りなき世の雲の上は　在りし昔に変はらねど　見し玉簾の　内やゆかしき　内ぞゆかしき

解説

江戸時代後期の作曲。平安時代の六歌仙の一人、小野小町の伝説に取材した七つの謡曲「草紙洗小町」「通小町」「雨乞小町」「関寺小町」「鸚鵡小町」「卒都婆小町」「清水小町」「鸚鵡小町」の内容を取り入れながら順につづる。前半では、絶世の美女と言われた小野小町の、若かりし頃の才色兼備のエピソードがうたわれる。しかし後半では打って変わり、老いさらばえた小町が、放浪した末にわび住まいする草庵で、かつて仕えた華やかな宮中での生活を懐かしむ姿が描かれる。まさに〝花の色は移りにけりないたづらに〟である。

箏　川原　信之
三絃　福田　恭子
尺八　津上　弘道

四、鶴之巣籠

尺八古典本曲
普大寺所伝

解説

「鶴之巣籠」は、古くから各地で尺八や胡弓の代表的な曲として伝えられている。これらは、ひな鶴の誕生から親鳥の愛情、巣立ちによる離別と親鳥の死という一連の物語を背景に、親子の愛、父母の恩を共通テーマとしている。浜松の虚無僧寺、普大寺に伝えられた同曲は、開放的で軽快な趣を特色とする。コロコロ、カラカラと呼ばれる尺八独自の技法（鶴の鳴き声や羽ばたきを模したとされる）が繰り返され、無拍節な前奏と拍節的曲調が特徴で、段落的構成となっている。

尺八　脇村　如峰
神　令

五、袖香炉

峰崎勾当　作曲
西川箕乃三郎　振付

三絃　渡辺　祐人
地歌舞　西川箕乃三郎

歌詞

春の夜の闇はあやなしそれかとよ　香やは隠るる梅の花
散れど香りはなほ残る　袂に伽羅の煙り草
きつく惜しめどその甲斐もなき魂衣ほんにまあ
柳は緑　紅の　花を見捨てて帰る雁

解説

天明五年（１７８５年）に没した豊賀検校をしのんで、その追善に作曲された。冒頭の「春の夜の闇はあやなし」は古今和歌集に載る凡河内躬恒の歌によっており、「それかとよ香やは隠るる」の部分に「とよか」の名を読み込んでいる。また、「柳は緑　紅の花」は北宋の朱淑真の詩「愁懐」から、「花を見捨てて帰る雁」は古今集の伊勢の歌から引用している。闇、隠るる、散れど、惜しめど、甲斐もなき、見捨てて、といった哀惜の言葉がちりばめられている一方で、どことなく華やいだ曲調である。

参考文献
・「邦楽百科辞典」（吉川英史監修、音楽之友社）

六、末の契

松浦検校　作曲
浦崎検校　箏手付

箏　川原　信之
三絃　松浦　元義
尺八　河宮　拓郎

歌詞

白浪の　かかる憂き身と知らでやは　わかにみるめを恋すてふ　渚に迷ふ海女小舟　浮きつ沈みつ寄る辺さへ　荒磯伝ふ芦田鶴の　啼きてぞともに
＜手事＞
手束弓　春を心の花とみて
忘れ給ふなかくしつつ　八千代ふるとも君まして　心の末の契り違ふな

解説

松浦検校（生年不明、１７５０頃？～１８２２）の作曲になる手事物。白浪、海女小舟、芦田鶴（鶴のこと）など磯や渚にまつわる景物によせて切々たる愛慕の情を歌うラブソングである。一般に地歌は「表拍＋裏間」という擬似的な二拍子で律せられ、表拍に強勢を置きながらノリ（スイング）をつくっていくが、この曲は、表裏を頻繁に入れ替える旋律・拍の構成がユニーク。松浦検校には他に「四季の眺」「若菜」「宇治巡り」などの作曲があり、いずれも旋律美と洒脱な転調で魅せる傑作である。

七、ゆき

峰崎勾当　作曲

三絃　鈴木みのり

歌詞

花も雪も払えば清き袂かな
ほんに昔の事よ　我が待つ人は我を待ちけん
鴛鴦の雄鳥に物思羽の　凍る衾に鳴く音もさぞな　さなきだに　心も遠き夜半の鐘
聞くも寂しき一人寝の　枕に響く霰の音も　もしやといつそ堰かねて　落つる涙の氷柱より　辛き命は惜しからねども　恋しき人は罪深く　思わぬ事の悲しさに　捨てた憂き捨てた浮世の山かづら

解説

芸妓であった女が、来ぬ人を待って夜を明かした過去を回想しつつ、仏門に入った現在の清浄な心境を述懐した曲。「心も遠き夜半の鐘」の後にある美しい合いの手は「雪の手」として知られ、歌舞伎芝居などの他種目で、雪の降る描写に採り入れられる。ただし、この合いの手について、地歌の立場からの諸解説本では、降雪の描写と断定することを避けているのをよく見る。

参考文献
・「増補改訂　箏曲歌詞解明」（松沢冬秀著、邦楽社）
・「邦楽曲名事典」（平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭監修、平凡社）
・「邦楽百科辞典」（吉川英史監修、音楽之友社）

八、新浮舟

松浦検校　作曲
八重崎検校　箏手付

箏　阿部　広宙
三絃　渡辺　祐人
尺八　二階堂喜仁

歌詞

まれ人の心の薫り忘れねど
色香もあやに咲く花の
仇し匂ひにほだされて　つつましき名も橘や
小島が崎に誓ひてし　その浮舟の行方さへ　いざ白波の音すごき
＜手事＞
身も宇治川の藻屑とも　なりは果てなで世の中の　夢の渡りの浮橋を
辿りながらも契りはあれや
涼しき道に入れんとて　現にかへす小野の山里

解説

『源氏物語』の宇治十帖を題材とする。浮舟なる薄幸の女性が、匂宮と薫君から思いを寄せられ、板挟みとなって宇治川に身投げしたが果たせず、流転の末に比叡の麓小野の里で尼となって隠れ住んだ、過ぎ去った夢のような身の上を回想するという悲恋をうたっている。箏と三味線の掛け合いが多く、器楽性に富んでいる。三橋検校作曲の箏組歌の「浮舟」や、峰崎勾当作曲の源氏物語と関係ない端歌の「浮舟」などがあり、それらと区別するために「新浮舟」といわれるようになった。

参考文献
・「邦楽百科辞典」（吉川英史監修、音楽之友社）
・「続・箏曲歌詞解明」（松沢冬秀著、三曲稚風会）

尺八古典本曲
根笹派所伝

九、通り・門付け・鉢返し

尺八　大平　如遥

解説

通り・門付け・鉢返しの各曲はそれぞれ独立した曲であるが、実際には連続して演奏される。托鉢（たくはつ）のための曲として互いに密接な関係にある曲であるため、ひとまとめにして扱う。「通り」は、虚無僧が街路を歩みつつ吹奏する曲で、「普化成仏の曲」とされる。「門付け」は吹行中、在家の人より仏の供養を望まれたとき、門前に立ち、門付け供養をするための曲である。「鉢返し」は米などの布施を受けた時、その鉢を手元に返し、離別の挨拶として奏する曲である。

峰崎勾当　作曲

十、残月

箏　阿部　勇介
三絃　徳納　由樹
尺八　成澤　和則

歌詞

磯辺の松に葉隠れて　沖の方
へと入（い）る月の　光や夢の世を
早う
覚めて真如（しんにょ）の明らけき　月の
都に住むやらん
＜手事＞
今は伝（つ）てだに朧夜の　月日ば
かりは巡り来て

解説

作曲者の門人である松屋某の娘が若くして亡くなったのを追善した曲とされ、題名はその法名・残月信女にちなんだものとされる。前歌で月の都（極楽浄土）に逝ってしまった故人への哀悼の意が述べられ、五段から成る手事では「音の花束」ともいわれる曲調に変わり、後歌では「月日ばかりは巡り来て」と、嘆息するような無常の感が述べられて終わる。

地歌の中でも傑作との評が多く、この曲を愛した谷崎潤一郎の生誕祭は「残月祭」と名付けられ、また内田百閒の小説『残月』の題材ともなっている。

出演者

上原ひろ子（竹友会）
大平　如遥（竹友会）
川原　信之（竹友会）
河宮　拓郎（虚竹会）
嶋長　直志（竹友会）
鈴木みのり（竹友会）
徳納　由樹（竹友会）
成澤　和則（虚竹会）
松浦　元義（竹友会）
脇村　如峰（竹友会）
渡辺　祐人（竹友会）

【早稲田大学邦楽３サークル】

虚竹（こちく）会：1905年頃創立の尺八同好会。琴古流宗家竹友社・川瀬庸輔師の指導を仰ぐ。
竹友（ちくゆう）会：1920年創立の尺八・三絃・箏の同好会。尺八は如道会・神令師、三絃・箏は絃声ひなげし会・阿部勇介師の指導を仰ぐ。
箏曲研究会：1956年創立の生田流箏曲の同好会。宮城社大師範・岩城弘子師の指導を仰ぐ。

「有楽伯ブログ」「有楽伯公式 Twitter アカウント」に曲紹介や出演者コメントなど詳しく掲載しています。
「有楽伯」で検索または右の QR コードからアクセスのうえ、ぜひお読みください。

ブログ　Twitter

賛助出演者

阿部　広宙

学習院大学三曲研究部絲竹会にて箏を始める。倉持和枝氏に師事。カフェでのミニコンサートや福祉施設での慰問演奏など、幅広く活動している。

阿部　勇介

国立音楽大学卒業後、富樫教子氏、阿部幸夫・むつみに師事。九州系地歌三絃・箏曲を学ぶ。ＮＨＫ邦楽技能者育成会第49期卒業。早稲田大学竹友会師範。

神　令

尺八古典本曲の集大成者・神如道を祖父とする。東京藝術大学大学院修士課程修了。現在、早稲田大学竹友会師範、東京藝術大学教育研究助手。

津上　弘道

東京大学卒業後、東京藝術大学音楽学部に進学。学内にて「安宅賞」「アカンサス音楽賞」「同声会賞」を受賞。現在、東京藝術大学大学院在学。

二階堂　喜仁

上智大学在学時、箏曲部に所属。２０１２年12月より琴古流尺八を元永拓氏に師事。15年7月より和洋楽器アンサンブルＭＡＲＩＯに所属し活動中。

西川　箕乃三郎

日本舞踊家。西川流五代目家元・西川箕乃助師の下で芸を磨いている。第14回ソウル国際舞踊コンクール男子民族舞踊シニアの部で第2位受賞。

福田　恭子

東京藝術大学大学院博士後期課程修了。博士号（音楽）取得。これまでにロシア、イギリス、中国にて海外演奏を経験。現在、同大学教育研究助手。

吉住　秀之

明治大学在学時、三曲研究会に所属。同会の定期演奏会に10年連続での出演経験を持つ。現在は南海佳子氏に師事し、流山の演奏会などに出演。

（敬称略、50音順）

舞台・進行　髙橋楽器店（大山本店）